



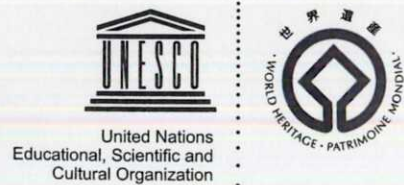
第8代UNESCO事務局長 松浦晃一郎



東京大学教授 西村幸夫

特別対談

世界遺産とともに歩んで—— 在任10年の成果と今後の課題



第8代UNESCO事務局長として
松浦晃一郎氏が世界遺産と密接に関わってこられた1999年から2009年、
世界遺産は文字どおり人類全体の遺産として成長し、UNESCOを代表する事業となった。
今回は文化遺産を中心にこの10年をふりかえるとともに、
世界遺産が直面する問題と今後の展望について語り合った。

* 肩書きはいずれも対談当時(2009年8月3日)のもの。

保護と開発のはざまに揺れた10年

西村 松浦さんはUNESCO事務局長に1999年に就任され、2009年11月に退任されるまでの間、世界遺産に関してはさまざまな事件がありました。大変な10年だったのではないかと思います。

松浦 私が事務局長に就任したのは1999年の11月ですが、その前の1年間は世界遺産委員会の議長をしていたので、実際に世界遺産とかかわり始めたのは1998年のことです。それまで世界遺産委員会というのは、新規登録に関する議論が中心で、遺産の保存状態については、時折議論があったものの十分ではなかった。民間やNGOなどから訴えのあったものを、そのつど取り上げていたくらいです。そこで、もっと組織的に、まず政府が責任をもってモニタリングし、その報告を委員会に出すことを提案、推進したんです。ちょうど、世界遺産委員会が第1回目の世界遺産登録を行った1978年から20年経った節目の年でした。

西村 締約国政府が定期的なモニタリングとその報告を行うという制度が、松浦さんが議長をされた1998年の世界遺産委員会(京都)での決議によって導入されましたね。具体的には2000年にモニタリングが始まり、2006年に第1ラウンドが終了しました。2007年から第2ラウンドが始まっています。

松浦 世界遺産委員会議長を退いた後も、委員会へは冒頭だけでも出席するようにしていますが、2009年にスペインのセビリアで開かれた委員会では、新規登録と保護管理の議論が半々になっています。モニタリングをして保存状態を議論することは非常に重要で、世界遺産の歴史の中でも注目できる進展だと思っています。



2008年9月、北朝鮮初の世界遺産「高句麗古墳群」(2004年登録・文化遺産)を訪れた松浦事務局長。 © 松浦晃一郎

西村 それと同時に、1998年はオーストラリアの世界遺産「カカドゥ国立公園」(写真下)の問題があり、開発か保護かという問題で、議長として非常に微妙な判断を迫られましたね。

松浦 カカドゥで始まった鉱山開発をやめさせるか否かで議論が紛糾し、相当深刻な状況でした。私は、いざとなれば世界遺産リストから削除するという事態もあり得ると思っていた。しかしオーストラリア政府は、削除は何か何でも避けたいと。それで、世界遺産委員会の注文をのむという形で開発の延期を決め、遺産を維持したわけです。しかし、あれはひとつの例にすぎず、やはりすべての世界遺産を保護するには限界があります。

西村 2007年にはついにオマーンの「アラビアオリックスの保護区」が、2009年にはドイツの「ドレスデン・エルベ渓谷」が、世界遺産リストから削除されました。

松浦 まさに10年前のあのころから、開発か保護かといった問題が一層現実味を帯びてきました。世界遺産委員会としては、保存状態にもしっかり注文をつけ、その注文が受け入れられなければリストから削除すると。そういうかなり厳しい態度をとることを、私自身も決意しました。それは、いま考えても正しかったと思います。毅然とした態度をとらなければ、遺産の保存に真剣に取り組んでもらえないという現実もあります。さらにいえば、UNESCOが世界遺産に対して圧力をかけるとすれば、その唯一の手段がリストからの削除で、それ以外ないんですね。「アラビアオリックスの保護区」は、密猟と生息地の開発が問題となりましたが、オマーン政府の対応にはちょっと中途半端なところがあり、オーストラリア政府のような必死な感じはありませんでした。



カカドゥ国立公園(オーストラリア連邦):1981年複合遺産として登録。世界遺産の中心部に、登録地から外して複数のウラン鉱山があり(写真中央)、問題となっている。 © 工藤父母道

